

精神保健福祉士実習における実習プログラムと評価項目の開発

Development of the education program and evaluation item in practice learning in psychiatric social worker

朝倉 由衣
Yui Asakura

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 現代社会研究専攻 修士課程

キーワード : スーパービジョン, 実習指導, 精神保健福祉士

Key words : Supervision, Training instruction, Psychiatric social worker

1. 研究目的

本研究は、社会福祉専門職の一つである精神保健福祉士の養成課程における実習スーパービジョンの方法と評価システムの開発を行うことを目的としている。我が国では、2007年の社会福祉士及び介護福祉士法改正の際に、国家資格取得後も質を担保するために研修制度の充実と認定社会福祉士制度等の創設が重視され、特に社会福祉専門職に対するスーパービジョンの実施が制度の中核に位置づけられた。すなわち、専門性の高い社会福祉専門職の人材育成と確保に関する社会的な議論が進む中、ソーシャルワーク・スーパービジョンのあり方と、今後の発展の方向性を示すことは急務となっている。

これまで、精神保健福祉士養成教育の中で精神保健福祉援助実習(以下、現場実習)の教育目標及び教育項目(獲得すべき内容)、方法は示されているものの、それらを達成するための具体的な実習プログラムの策定と達成度を測る評価基準は個々の実習先の裁量に委ねられてきた。本研究では、具体的な実習プログラムを作成することで、精神科医療機関における実習プログラムを平準化し社会福祉専門職養成の質の担保を図ることに繋がると言える。また養成校と連携し、養成校における実習前指導、実習先における現場実習時の指導、養成校における実習事後指導におけるそれぞれの具体的評価項目を作成し、実習前から実習後までを連動させ一貫した指導が行えるようにすることは、意義があると言えよう。また現場実習では、ソーシャルワーク訓練までを含めた、実践的な実習を行うことで、より実践力のある精神保健福祉士を育てることに繋がる。

2. 研究実施内容

はじめに、厚生労働省が提示している、精神保健福祉援助実習の「ねらい」に即し、ルーブリックの手法を参考に、精神科医療機関での現場実習において獲得すべき内容を作成した。具体的には、「ねらい」を大項目とし、それをより具体的な内容に表現した大項目の説明を入れ、その大項目を実際の現場の業務内容のどの分野に関係しているのかを中項目の説明とした。そしてさらに4段階のレベルに分け、各段階で獲得すべき内容を示した。なお各段階で獲得すべき内容は、公益社団法人日本精神保健福祉士協会が示す「業務指針及び業務分類 第2版」に基づいている。レベル1は、実習前までに獲得すべき内容とし、レベル2～3は実習中に獲得すべき内容、レベル4は実習終了後から初任者までに獲得すべき内容とした。この評価表を用いて、各段階毎に理解している・ほぼ理解している・あまり理解していない・理解していないで自己評価表を作成した。次に、平成29年8月から9月にかけて埼玉精神神経センターで現場実習を行う大妻女子大学人間関係学部人間福祉学科4年生2名に対し、この作成した評価基準を現場実習前に実習生及び養成校の指導教員に提示し、両者で実習前評価を行って頂いた。実習前評価を踏まえて、実習開始前に実習指導者と実習生で実習オリエンテーションを実施し、実習生の達成度や課題の確認を行った。評価表を用いることで、実習生の能力や理解度をより客観的に把握することができ、その後の実習スーパービジョンを行うにあたって参考となった。現場実習開始後に実習スーパービジョンを実施し、現場実習終了時に実習生と実習指導者で評価を行った。評価表を使用し実習生と実習指導者が一緒に実習

の振り返りを行うことで、「ねらい」に即して、万遍なく評価を行うことができた。評価表を使用する前の実習の振り返りは、ただ実習の感想を述べたり、実習の中で印象に残った一部分だけを振り返ったりしていることが多かった。しかし評価表という、実習開始前から使用している共通の評価表を用いることで、より実習終了後の振り返りが深まったと感じる。その後、養成校で行う現場実習事後指導、講義、国家試験を経て、再度、実習生と指導教員、実習指導者の3者で評価を実施した。実習生Aは、実習終了後に学内で実習報告を行い、自分の考えを言語化することで自分の考えの偏りや考え方の癖が見えるようになった。他の学生が他の医療機関で行った実習の発表で、他職種に患者の症状や状態を聞いていたことを知った。他の職種に聞くことで疾病や障害の理解がより深まったのではないかと、職種によって患者の見方が違うことや、業務内容が違うことで得られる患者の情報が違うことにも気づいた。実習終了時は、他職種連携について「あまり理解していない」に評価をしていたが、事後学習を経て「ほぼ理解している」に評価が変わっていった。実習生Bは、実習終了後に学内で実習報告を行い、実習で訪問看護に同行した他の実習生の話を聞き、病院実習では知り得なかった、生活のしづらさに気付いた。自己覚知については、実習期間中や実習終了時は、実習そのものに対する緊張が強く、振り返ることが十分できなかつた。しかし、実習が終わって、大学生活に戻ると、客観的に冷静に振り返れるようになったことに気づいた。それにより、実習中や実習直後には、理解できていなかった「自己覚知」とは何なのか、実習を契機に意識するようになった。両者とも、実習終了後に学内で実習生同士が実習報告を行ったことで、より自身の実習が深まった点が共通していた。まず自分の実習報告をするために、自分の実習を振り返り、それを他者に伝えるためにまとめ、発表する。そして自分が発表しただけではなく、他の学生の実習報告を聞くことで、自身の実習では気づけなかつたこと

に気づかされる。また、実習は机上で学んだ理論や知識、技術を実際に体験したり、実践する場である。しかしそれだけではなく、実習の中で直接患者と接する、そこで治療を受け入院生活を送る様子を目にしたことで、大学へ戻り事例を用いた模擬アセスメントを行ったり、支援計画を立てる際に、より実践的な内容を考えられる等、イメージの獲得にもつながっていた。

実習前指導・現場実習指導、実習事後指導の段階を、一つの評価表を用いて振り返り、実習は単体で成立しているのではなく、その三段階が相互に影響し始めて成立することが改めてわかった。

3. まとめと今後の課題

実習終了時には評価が「ほぼ理解している」に評価したが、大学に戻り事後指導を受け、他の学生の発表を聞いたりすることで、まだ理解できていないことがあるのではないかと気づき、同じ評価を選択してもその質が実習生自身の中で変化することがわかった。そのため、四段階の評価では評価し切れないばかりでなく、理解度の質が変わることを考えると、評価方法を再検討することが必要である。またそれは、評価の段階が4段階であるが、4段階では割り切れない、判断がつかねることも見られたため、質も含めた評価の段階や、その評価項目に関しても再考が必要である。また、この評価表は精神科医療機関に限定した評価表であり、この項目がすべてできたことで、ソーシャルワーカーとしてできるようになったとは一概に言えない。そこがこの研究の限界でもある。今後もより現場の実践に即した評価表や評価項目となるよう再考することが課題である。

4. この助成による発表論文

①雑誌論文

[1]藏野 ともみ, 古市 孝義, 朝倉 由衣, 認定社会福祉士制度の現状と課題, 人間関係学研究, 査読: 無, 19号, 2018年, p175~p18